



# Hukutana

No. 12 (September 1999)

The Bulletin of  
Japan Society for the Promotion of Science,  
Research Station, Nairobi

## ふくたーな

第12号 (1999年 9月)

日本学術振興会  
ナイロビ研究連絡センター  
ニュースレター

1 大塚和夫 スワヒリ・コーストでのさまざまな出会い  
OHTSUKA Kazuo Various encounters in Swahili Coast

4 はじめまして Hujambo?  
Self Introductions

高野智・芝田純也・吉田未穂・孫曉剛・石田慎一郎  
TAKANO Tomo, SHIBATA Sumiya, YOSHIDA Miho, SUN Xiaogang, ISHIDA Shin'ichiro

5 センター行事  
Meetings, News

6 講演  
Seminars

7 センター往来  
Visitors

8 センター雑報・編集後記  
Miscelanea, Editor's Note

アラブ研究者の見たアフリカ

## スワヒリ・コーストでのさまざまな出会い

大塚 和夫 東京都立大学

初めての「アフリカ」

7月末から8月初頭にかけて、私はスワヒリ・コーストを訪れる機会をえた。科研費「イスラーム地域研究」(代表・佐藤次高東大教授)によるもので、「ムスリム世界の文化摩擦」の調査がテーマであった。これまで、エジプトや北スーダンなど北アフリカのアラブ世界には何回も赴いたことはあるが、サハラ以南のアフリカ、そして南半球に足を踏み入れるのは初めてであった。スワヒリ語を勉強していないので、調査といっても出来ることはたかがしれている。それでも、スワヒリでの現地経験は、私のもつアラブ的イスラームのイメージを多少なりとも相対化することになるだろうという期待があった。

エアー・インディアでインドのムンバイ(ボンベイ)に寄って、まずタンザニアのダルエスサラームに入り、そこからザンジバルに向かってそこで1泊した。次にケニアのナイロビを経由して、モンバサ、ラムを1週間ほどまわるという旅程であった。ミジケンダのカウマ社会の調査を続けている菊地滋夫氏(明星大学)が同行してくれたので、スワヒリ語でのコミュニケーションや日程調整などをお願いすることができ、とても助かった。お陰でこれといったトラブルもなく、無事に

スワヒリ・コーストでの日程を消化できた。

また、ナイロビでは学振センターの駐在員の方々にもお世話になった。そのご依頼でこの原稿を書いている。エッセイ風のもので良いとのことだが、さて何をテーマにしようかと思いついていたら、ふとこのニューズレターの名前が目に入った。フクターナ、人と人が出会う、そうだこれをモチーフにしよう。以下では、今回の旅行を通して見えてきたいくつかの出会いについて記していきたい。

オマーンとスワヒリのネットワーク

第1の出会い、それは今回の調査をスムーズに運ぶことができた大きな理由となったものだ。出発前、私は友人のアメリカ人類学者、D・アイケルマン氏に近況を伝えるe-mailを送り、そこでスワヒリを訪ねる旨を伝えた。すると彼は、自分の調査地のひとつであるオマーンの人類学者がモンバサ出身であるから、コンタクトをしてみてもどうかと助言してくれた。そこで私はオマーンにメールを打った。だが日程の都合などで、オマーンの人類学者は私と会うことができないことが分かった。だが彼は、自分の親戚であり隣人でもある女性(のちにオマーンの病院に勤務している

Milima haikutani, lakini binadamu hukutana  
山と山は出会わないが、人は出会うものだ(スワヒリ語のことわざ)  
Mountains never meet, but human beings do - Swahili proverb

人物であることが分かった)が、休暇をとってモンバサにいたので連絡するように指示をしてくれた。

私はモンバサにメールを打った。その女性は自分のスケジュールが多忙なこともあったし、学者には学者がいいだろうと、自分の友人の言語学者(スワヒリ語が専門)に声をかけてくれた。この言語学者は、長年サウディアラビアの大学で教鞭をとっていたが、そこをやめ、モンバサに戻ってきたばかりであった。

結局この言語学者とは、私が日本にいる間にはコンタクト出来なかった。ナイロビに着き、電話でようやく話しが出来たのであった。スワヒリのイスラームのことが知りたいという私の希望を聞き、言語学者は彼の知り合いでスワヒリの言語や歴史に詳しく、詩人でもある人物を紹介してくれた。この詩人が、スワヒリの歴史やモンバサの現状に関する興味深いさまざまな話しを、われわれにしてくれたのである。また、言語学者は引っ越しの後片づけで忙しいなか、自宅にわれわれと詩人とを招いて談笑の場を設けてくれた。そして、そこにはオマーンの病院勤務の女性も、なんとか忙しい時間を割いて駆けつけてくれたのであった。

出会いはこれで終わらなかった。モンバサのあとにラム島訪問を予定していたわれわれは、もともとラム出身の詩人にどのホテルがよいか尋ねた。彼が推薦したのはSホテルであった。そこのオーナーが知り合いであるという。ラム島に着くとわれわれは目指すホテルに向かった。詩人の書いてくれた紹介状をオーナーに見せて、われわれはそのホテルに泊まることにした。話しを聞くと彼は、かつて女子中学の教師をしており、それから政治の世界に入って町長まで務めたという。今では政治からは離れ、ホテル業の他に、女性に技術を身につけさせる専門工房も運営している。

さらに、ラムの歴史やイスラームについて知りたいというわれわれの要望にこたえて彼が紹介してくれたのが、町なかでパン屋を営んでいる男性であった。彼はもともとイスラームの学者になろうとして専門的な勉強を続けていたのだが、父親が亡くなったので大学(サウディアラビアのメディナにあるイスラーム大学を目指していた)進学を断念したのだという。しかし、今でも勉強を続けており、英語、アラビア語に堪能な知識人なのである。パンの販売カウンターの横にある、日本風という2-3畳程度の小部屋が彼の書斎である。入ってみると、書棚にはアラビア語の宗教書などがずらりと並んでいた。ちなみに、彼のもとには、西江雅

之氏がこれまでに何回か訪ねてきているという。

このような、出来すぎとも思われるほどの幸運な出会いの連鎖によって、私は初めてスワヒリを訪れたにも関わらず、ポイントとなる話しをいくつも聞くことが出来た。アラブ世界でも人的ネットワークは重要である。だが、今回ほどその威力を思い知らされたことは少ない。そして改めて、これまで書物を通じた知識でしかなかったアラビア半島(オマーン)と東アフリカ海岸部とを結ぶネットワークの強さを身に沁みて感じたのである。だが、このネットワークはさらに東に伸び、インドをも組み込んでいる。このことを思い知ったのは、スワヒリにおけるイスラーム諸宗派のあり方を知ったからである。これがここでふれる第2の出会いとなる。

#### インド洋を渡ってきたイスラーム諸宗派

アラブ世界、とくに私がこれまで主に調べてきたエジプトやスーダンでは、たしかにイスラームとキリスト教の込み入った関係はあるが、イスラーム内部の宗派に関してはそれほど問題にならなかった。せいぜい、スーダンでのアンサール(マフディスト)、さらに急進的なイスラーム主義者のイデオロギーなどが「分派的」なものとして論じられる程度である。

ところがスワヒリでは、インド洋を通じたさまざまな出会いの結果、いくつものイスラーム宗派が共存している(以下、イスラームにあまり関心のない方には耳慣れない固有名詞が出てくるが、なにとぞ勘弁いただきたい)。この地域がイスラームのスナ派、そのなかでもシャーフィイー法学派に属するムスリムが主流であるという知識はもっていた。だが、その他にハナフィー法学派もいるという。もっとも、ラムのパン屋を営む知識人のように、祖父はインドから機械工として渡ってきたハナフィー派ムスリムであったが、父の代にシャーフィイー派に変わった(おそらくその法的解釈に従うようになった、という意味だろう)という人物もいる。

スワヒリ世界には17世紀以来、ハワーリジュ派系のイバード派の教義を信奉するオマーンの人々が進出してきた。とりわけ、19世紀にはブー・サイード朝がザンジバルを首都に定め、この地域一帯を支配下においた。現在のスワヒリでも、オマーン系ムスリムが暮らしており、その中にはイバード派もいる。われわ

れがザンジバルで泊まったホテルのオーナーがそうであった。さらに複雑なことに、彼はイラン出身のシーア派系12イマーム派の女性と結婚しており（これはかなり例外的であり、ザンジバルでも自分たちだけだと彼は言っていた）、子供の養育問題などで若干のトラブルがあるらしい。また、ザンジバルでは「12イマーム派事務所」という看板を目にしたし、モンバサでは12イマーム派系モスクが2つ、イバード派系モスクが1つあるという。

さらに、ポホール派が存在している。シーア派系らしいが恥ずかしいことに、私は初めて聞いた名称であった。帰国して調べてみると、シーア派内部で、12イマーム派とは袂を分かつイスマーイル派の系統に属する宗派であり、インドのムンバイやグジャラート地方を中心に勢力をもっているという。ここでもスワヒリとインドとのネットワークが確認されるのである。彼らはモンバサに2つのモスクをもっている。さらに、同じイスマーイル派であっても、ポホール派とは異なるニザール派の系統をくむアガーハーンの流れも、病院施設などを通して活動しているようである。

もうひとつ興味深かったのは、イラン・イスラーム革命以降、クウェイトを経由してシーア派12イマーム派系の活動資金が流れているらしいということだ。実際、ラム島では、19世紀後半に斬新な様式の預言者生誕祭（マウリディ）を導入し、大きなモスク（リヤード・モスク）を建造して聖者ともみなされている人物の孫の一人が、スンナ派から12イマーム派に改宗し、豊かな資金をバックに活動を続けているという。実際、そのグループが運営しているモスク（図書館や孤児院などの施設も併置され、かなり広い敷地を確保していた）のかたわらにある井戸のひとつには、クウェイトの何某氏の資金で掘られたものであるというプレートがつけられていた。その他、ワッハービーと総称されるサウディアラビア系の急進的改革派の動きも見られるようで、スワヒリも現代イスラーム世界の動向から切り離されているわけではないという思いを強くした。

#### ケニア内陸とのつながり

現代性という点から、第3の出会いに話しを移したが、それはあまり幸福なものとはいえないかもしれない。われわれが出会ったケニア・スワヒリのムスリムたちは異口同音に、最近町が汚くなり、治安も悪くなってきたという。その原因は、アップ・カントリー

（内陸部）から大量の移民が来たからだという。もちろん、このような彼らの認識が、社会科学的に妥当性であるかどうかを実証的に論じる立場に私はいない。しかし、それでも彼らの現状認識の一端を表わすものとして、この発言は意味をもつと思われる。またそのなかに、ムスリムとしての自分たちのアイデンティティを脅かす、アップ・カントリー出身のキリスト教徒に対する不満や憤りのようなものが潜んでいることも。ちなみに、ラム島では20年ほど前には町の外にカトリックの教会がひとつあったただだが、現在ではさまざまな宗派のキリスト教教会が10ほど建造されている。そして、イスラームからキリスト教への改宗をめぐるいざこざも、ときとして生じているとのことである。

これはケニアの国内政治の動向とも密接に関わる問題であり、たんなる宗教対立とすませて片づくものではないだろう。しかし、海を通した「国際的」出会いから形成されたスワヒリ世界は、今では陸路による新たな「国内的」出会いにどのように対応していくのかを真剣に問われているのかもしれない。

#### スワヒリはアラブとアフリカの出合いの場

以上が、1999年夏に私が経験し、改めて認識した3つの出会いの概略である。さらに、この文章を結ぶにあたって、第4の、未来形の出会いに是非ともふれておきたい。それは、われわれ研究者に直接関わるものなのである。

今回スワヒリを訪れ、その歴史と文化の豊饒さを改めて痛感した。それだけに、言語研究を除いて、日本ではほんの数えるしかスワヒリ研究者がいないという現実があまりにも寂しい。とりわけ、歴史学や人類学はそうである。中東研究者からはアフリカと思われ、(サハラ以南)アフリカの研究者からはイスラームと思われ、どちらからも敬遠されているフィールド、それがスワヒリであるといえよう。しかし、クレオールなどといった流行りの言葉をわざわざもちださずとも、ここは昔からさまざまな人と人が出会っては混じり合い、さらにそこに新たな出会いが積み重なって独特の文明を形成してきた地域である。知的好奇心を駆り立てないことがあるだろうか。

私は今後、アラブ・中東研究の同僚たちに、スワヒリ研究の面白さと重要性とを説くつもりでいる。本誌の読者諸兄姉の大半はいわゆるアフリカ研究者であろうが、内陸のフィールドでの疲れを癒す海辺の休養地

としてだけではなく、学問的関心の対象としてスワヒリ・コーストを見つめ直す方はいないのだろうか。また、そのような志をもつ大学院生などの若手は出てこ

ないのだろうか。中東研究とアフリカ研究が会う（フクターナ）場として、スワヒリ研究が日本でも根づき、発展する日が来ることを心から望みたい。 ㊦

## Various Encounters in Swahili Coast

OHTSUKA KAZUO (Tokyo Metropolitan University)

The author, a social anthropologist studying Arabic world, shows some aspects of his encounters in his first visit to Sub-Saharan Africa.

The first fact is the connection of people in the Arabian Peninsula with those in the Swahili Coast from USA to Oman, then to Mombasa, lastly to Lamu Island. This human network enabled his stay to be quite fruitful. The second result from the fact is that various Islamic sects have come to the Swahili Coast across the Indian Ocean. Their interrelations are more complicated than those he finds in Egypt or in the Sudan, which are his main

research field. The third is a somewhat unhappy encounter with christian people from Kenyan inlands which sometimes brings about some tensions between believers of the two religions as pointed out by native Swahili. The fourth is concerned with researchers ourselves, the Swahili Coast which is a region where Arabs and Africans have met and mixed with each other since the old days, should be regarded as an attractive field of study for the researchers of the Middle Eastern and African studies. ㊦

English summary by the Editor

## はじめまして Hujambo? Self Introductions

高野智 TAKANO Tomo (京都大学 Kyoto University)

初めまして。京都大学自然人類学研究室、修士2回生の高野と申します。たつての希望で本年度の発掘調査隊に加わせていただき、ケニアにやってきました。初めてのケニア、初めてのアフリカです。

7月20日に日本を発ち、早くも3ヶ月。思い返せばいろいろなことがありました。化石の発掘調査に従事できるということ自体、何ものにもかえがたい貴重な体験ですが、本業以外でも、他では得られない様々な経験をさせてもらっています。なかでも、調査地で

あるナチョラでの、トゥルカナのワーカーたちと過ごした約1ヶ月間は、楽しくもあり、また様々なことを考えさせられた日々でした。リフトバレーの雄大な光景も、脳裏に鮮明に焼きついています。

さすがに3ヶ月も経つと、日本が恋しくなってきましたが、日本に帰ればまた、ケニア、というよりアフリカに行きたくなることと思います。どうやらはまってしまったようです。

芝田純也 SHIBATA Sumiya (京都大学 Kyoto University)

アフリカではいろんなことを体験しました。フィールド調査やナイロビでの生活は僕にとってかなり刺激的で、石田隊の発掘調査に参加させていただき先生方に対して本当に感謝しております。サンプルヒルズやナチョラでの生活においては、化石の発掘だけではなくそこに住んでいるトゥルカナの人々との交流もあり、フィールド調査のいろんな側面を見ることができました。そして、フィールド調査の大変さを痛感し、それをこなしている先生や先輩方の“すごさ”に圧倒され

ました。僕はといえば隊の活動に迷惑をかけるだけで何も役に立つことができなかったと思います。

今年度のフィールド調査が終了しナイロビに帰ってきましたが、帰国するまでの間博物館での仕事があるので何とか隊の活動に役に立てるようがんばりたいです。

ところでナイロビでの生活において、僕はYumingとヒッキーの歌のファンになってしまいました。僕のナイロビナイトを彩ってくれたのは彼女たちでした。

## 吉田未穂 YOSHIDA Miho (東京都立大学 Tokyo Metropolitan University)

観光について調査するため7月から9月までケニアに滞在しました。専攻は人文地理学で、エスニック・ツーリズム(民族観光)に興味を持っています。「観光マサイ」と呼ばれる人々の在り方に注目し、マサイの人々が観光に関わっていく経緯やその関わり方を通じて彼らの生き方やその戦略の一端でも垣間見ることができればと思っています。今回は初めてのフィールドワー

クでしたが、アフリカの懐の大きさ、深さ、複雑さに興奮したり、絶望(笑)したり、あごがはずれたり、もがきにもがいた刺激的な日々を送りました。そして、短い滞在期間でしたが、どうやら予想を裏切られることの快感に目覚めてしまった様です。今は集めてきた資料の整理に追われながらも、次回ナイロビに降り立つ日のことを心待ちにする日々です。

## 孫 晓刚 SUN Xiaogang (筑波大学 Tsukuba University)

一週間の北ケニアのサファリを終え、ナイロビに戻ってきました。北の灼熱な太陽を経験してから、初めて南半球にあるナイロビが冬季節であることがわかりました。ケニアは二回目になりますが、また初心者の気持ちが変わっていません。9月から来年の1月まで北ケニアのレンディーレ・ランドで、レンディーレ族の

ラクダ放牧について調査する予定です。約5か月間、ラクダとともに、北ケニアの青空の下で、のんびりと旅してきます。(plus)私は中国洛陽の出身で、筑波大学の留学生です。在日歴7年です。どうぞよろしくお願ひします。

## 石田慎一郎 ISHIDA Shin'ichiro (東京都立大学 Tokyo Metropolitan University)

1999年8月4日にケニアに到着いたしました。初めてのアフリカ体験です。私は社会人類学を専攻する大学院生として、松園万亀雄先生のご指導のもとケニアをフィールドに勉強を進めております。今回は松園先生が組織されている共同研究プロジェクトの一部として6か月間のフィールドワークを実施する機会に恵

まれました。私自身の調査研究の主な関心はケニアの法・司法の現状を社会人類学的視野から分析することであり、安全と健康を最優先し、6か月間の生活を設計していこうと考えております。ご指導の程よろしくお願ひいたします。

## センター行事 Meetings, News

8月11日: 作道派遣研究員、人類学の調査地の実情視察のため北ケニア各地を訪問 (21日まで)

8月20日: 巻島派遣研究員、調査地視察のためBaragoi 訪問 (22日まで)

8月24日: 日本大使公邸にて講演会開催。石田英実京都大学教授「サルからヒトへ: 北ケニアでの日本隊の調査から」詳細別稿

8月30日: 巻島派遣研究員、Nachola で野外調査、

標本採集 (9月8日まで)

9月14日: 三輪史郎理事ナイロビセンター訪問 (17日まで)。15日: ケニア中央医学研究所 (Kenya Medical Research Institute, KEMRI) 訪問、研究施設見学。記念講演 "Red Cell Enzymopathy Associated with Hereditary Hemolytic Anemia" (詳細別稿)。17日: ケニア国立博物館 (National Museums of Kenya) 訪問、館長 Dr. George Abungu 氏他と会談、古生物学・植物学・昆虫学各研究部門、展示施設見学

## 講演会 在ケニア日本大使館、ケニア日本人会、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター共催

ケニアで行われている日本の学術調査の成果を広くケニア在留日本人に知っていただくため、3者共催による講演会を開きました。当日は開催直前に降り出した大雨にもかかわらず、予想外の参加がありました。

話手: 石田英実(京都大学大学院理学研究科)

演題: 「サルからヒトへ: 北ケニアでの日本隊の調査から」

場所: 日本大使公邸

日時: 1999年8月24日(火) 18時~19時30分

言語: 日本語

参加: 約85名

類人猿の進化と、その延長線上にヒトの起源を明らかにすることを日本調査隊が目指しています。1980年以来、北ケニアのサンプルヒルズとナチョラ地域、時代にして1500万年前から500万年前の地層を対象に、ヒト上科霊長類(類人猿とヒト)の発掘、地質学および古生物学調査を行っています。これまでに大型ヒト上科のサンプルピテクス、中型のケニアピテクスなど多くの霊長類化石の発見に恵まれ、それらが生きていた環境の分析も進行中です。これら最近の人類起源・進化学の動向を含めて、成果を紹介していただきました。

### Lecture Co-organized by Embassy of Japan, Japanese Society of Kenya and JSPS Nairobi

Speaker: ISHIDA Hidemi (Graduate School of Science, Kyoto University)

Title: From Ape to Human: Report of Japanese Party in Northern Kenya

Place: Residence of Embassy of Japan

Date: 24th August 1999 (Tuesday)

Time: 18:00 to 19:30

Language: Japanese

Participant: ca. 85 persons

An introduction for Japanese residents in Kenya to a research work of the Japanese party which has been working on paleoanthropology in Northern Kenya for 20 years.

## KEMRI学術セミナー 三輪理事のKEMRI訪問にあたって記念として講演

話手: 三輪史郎(日本学術振興会理事・沖中記念成人病研究所)

演題: Red Cell Enzymopathy Associated with Hereditary Hemolytic Anemia

場所: KEMRI 講堂

日時: 1999年9月15日(水) 15時~16時30分

言語: 英語

参加: 約60名

### KEMRI Scientific Seminar

Speaker: MIWA Shiro (Director, JSPS / Director, Okinaka Memorial Institute for Medical Research)

Title: Red Cell Enzymopathy Associated with Hereditary Hemolytic Anemia

Place: KEMRI Conference Hall

Date: 15th September 1999 (Wednesday)

Time: 15:00 to 16:30

Language: English

Participant: ca. 60 persons

## センター往来 Visitors

## 8月 August

- 3 立入都 TACHIIRI Kaoru (筑波大学 Tsukuba University)
- 3 安井金也 YASUI Kin'ya (鹿児島大学 Kagoshima University)
- 6 石田慎一郎 ISHIDA Shin'ichiro (東京都立大学 Tokyo Metropolitan University)
- 8 北村光二 KITAMURA Koji (弘前大学 Hirosaki University)  
内藤直樹 NAITO Naoki (京都大学 Kyoto University)
- 9 松田素二 MATSUDA Motoji (京都大学 Kyoto University)
- 9 中野良彦 NAKANO Yoshihiko (大阪大学 Osaka University)
- 9 松園万亀雄 MATSUZONO Makio (東京都立大学 Tokyo Metropolitan University)  
小馬徹 KONMA Toru (神奈川大学 Kanagawa University)
- 12 Githiri S. Mwangi
- 12 佐藤俊 SATO Shun, 孫曉剛 SUN Xiaogang (筑波大学 Tsukuba University)
- 17 菊地美貴子 KIKUCHI Mikiko, 菊川水際 KIKUGAWA Migiwa (筑波大学 Tsukuba University)
- 19 樋口茂生 HIGUCHI Shigeo (千葉県環境研究所 Chiba Prefectural Institute for Environmental Science)
- 19 S. M. Mwakio (Egerton University)
- 20 鼻野木由香 HANANOI Yuka (神戸大学 Kobe University)
- 20 杉田映理 SUGITA Eri (Florida University)
- 23 和田正平 WADA Shohei (甲子園大学 Koshien University)
- 23 Samuel Otieno Olago
- 24 柴田彩子 SHIBATA Ayako (筑波大学 Tsukuba University)
- 26 岸田袈裟 KISHIDA Kesa (岩手医科大学 Iwate University of Medicine)
- 27 Martin Ewoi
- 28 沢田順弘 SAWADA Yoshihiro, 中山勝博 NAKAYAMA Katsuhiko,  
實吉玄貴 SANEYOSHI Mototaka, 櫻根知夏子 KASHINE Chikako (島根大学 SHIMANE University)
- 30 Juma Boya, Humphrey Bahati, Eduard Oseke

## 9月 September

- 6 高橋和奈枝 TAKAHASHI Kanae 永野路子 NAGANO Michiko (少年ケニヤの友 Friends Society for Kenyan Children)
- 8 浅野友加里 ASANO Yukari
- 12 Richard Nadome
- 13 諏訪元 SUWA Gen (東京大学 University of Tokyo)
- 15 伊谷純一郎 ITANI Jun'ichiro (京都大学名誉教授 Professor Emeritus of Kyoto University)
- 17 梅谷深 UMEYA Kiyoshi (一橋大学 Hitotsubashi University)
- 17 鈴木平三 SUZUKI Akira (Kenya Institute of Surveying and Mapping)
- 18 西崎伸子 NISHIZAKI Nobuko (京都大学 Kyoto University)
- 20 岩川千秋 IWAKAWA Chiaki, 井上清司 INOUE Seiji (IOS Afric)
- 30 山極寿一 YAMAGIWA Juichi (京都大学 Kyoto University)
- 30 今野浩太郎 KONNO Kotaro (蚕糸・昆虫農業技術研究所 National Institute of Sericultural and Entomological Science)
- 30 船岡美保 FUNAOKA Miho (White Lion Safari Ltd.)

## センター雑報 Miscelanea

9月14日:番犬ジュニア6頭出産、3頭はのちに死亡

## 編集後記

センター往来をみていただければおわかりのように、8月9日は大繁盛で、おかげさまで多くの方々に利用していただきました。一山越えたいま、”燃え尽き症候群”気味の巻島さんとともに、私もほっと一息ついています。ナイロビの気候も暖かくなり、プールにでもいこうかという気にもなってきました。ジャカラランダは満開から散り始めております。学振のクロトンは、風が吹けば爆弾のように屋根や車のボンネットを襲います。朝から落ち着きの無かった犬のジャンボが気になって、メゾネットの裏の小屋に行くと、ジュニアは、子犬を6匹産んでいました。生き残ったのは3匹のめす。産婦人科待合室の夫のようなジャンボの振る舞い

がいま思い出してもおかしくて、笑ってしまいます。ナイロビの日常はたおやかに過ぎていきます。サファリに出ると、まったなしの流れのなかに放り込まれる楽しみがあります。毎日、ひたくりや殺人、壊滅的な交通事故が起こります。リゾートには、ケニアを点から点へと楽しむ人たちがいます。政争があります。腐敗があります。干ばつが、飢饉があります。ナイロビ生活での現実感覚は意外にうつろうものです。私もあと一ヶ月半、巻島さんとうつろいながらもリアルにすごそうと思います(作)

◇はからずも作道さんに喝破されたように、この山小屋の主としては燃え尽き気味◇空港での見送りは寂しいもの、日本での成果の取りまとめを期待して送り出します◇研究者としてはこれからがかけいれどきです◇カイロセンター派遣の経験のある大塚さんにはアラブ研究者の見たアフリカをお願いしました◇利用しやすいセンターを目指してきた運営は如何なものでしょう、任期も半ばを越えました(巻)

⑧

## Hukutana No. 12

Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi

Issued: 30th September 1999

Editor: MAKISHIMA, Haruyuki &amp; SAKUMICHI, Shinsuke

Publisher: JSPS Research Station, Nairobi

Printer: Jarolin Enterprises, Nairobi

*For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The views expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors and do not necessarily reflect the views of Japan Society for the Promotion of Science.*

© 1999 Japan Society for the Promotion of Science, Research Station, Nairobi. All rights reserved.

P. O. Box 14958, Nairobi, KENYA. Phone: +254-2-442424; Fax: +254-2-442112; e-mail: jsps@swiftkenya.com

## ふくたな◇第12号

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース

発行日◇1999年9月30日

編集・発行者◇巻島美幸・作道信介

発行所◇日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主張・意見は執筆者個人のものです。

Japan Society for the Promotion of Science,  
Research Station, Nairobi  
P. O. Box 14958  
Nairobi, KENYA

PAR AVION  
VIA AIR MAIL